

原稿一枚で書く
クトゥルフ神話TRPG
パロディシナリオ
「仮面」

ユキ・オトコ

シナリオ

世間では、血なまぐさい連続失踪事件が報道されている。

被害者は全員影も形もなくいなくなり、現場にはただ大量の血痕のみが残されている。。

そして、そこにとある都市伝説が追加されるようになる。

この事件の捜査を担当していた刑事が、あるとき被害現場から宴会のような物音がマンホールから響いたことに気が付き、所轄の警官に命綱を託し、自ら底に降りて行った。

数分経って命綱の反応が鈍いことから警官は綱を引き上げるが、命綱は力技で引きちぎられていた。

後日、下水道の処理場で警察手帳の様なものが見つかり、水と血と破けボロボロになっていたが唯一判読できた言葉が「仮面のやつらに気を付けろ」だった。刑事の失踪以後、失踪事件は急になりをひそめることになったのだった。

この都市伝説は仮面舞踏会【マスカレード】と呼ばれ、主にオカルト系の探索者たちを引き付けるのであった。

補足（というか本編）

登場人物

失踪事件の被害者たち：文字通りただの被害者。導入として探索者の知人や家族、友人が被害者となったというのもあり。

所轄の警官：実は元人間のグール。育ての親でもあるマスカレードの集団に唆されて刑事となって価値のない死体（自殺した人間や無縁仏となった死刑囚など）を提供してきた。しかし、マスカレードが生きた人間を攫い、自身の宴会のメインディッシュにしている事実を知り離反。人を殺さないことが元人間としての彼の矜持であり、マスカレードはその一線を踏み越えてしまった。しかし、知性もグールとしても格上の家族を仕留めるには巻き添えしかない。彼はマスカレードと自分が相打ちになっても良いように体の中に爆薬を仕込んでいる。

刑事：マスカレードの饗宴に遭遇し、そうとは知らずに被害者の臓物を食してしまう。結果として、彼は死肉を嗜好する異常食欲に陥り、マスカレードたちと共謀して人をより緻密に誘拐、殺害していくことになる。街中で話題に上らないのは、その被害者が密入国者や独り身の老人だったり被害が表に出にくい対象ばかり選んでいたからである。

マスカレード：仮面をつけたグール集団（4体）。元々は所轄の警官に慕われていた醜くも優しい気質の食屍鬼だった。しかし、下水道で彼らが見つけた魔術書の断片が彼らに新たな知性と残忍性をもたらすこととなった。

彼らは醜い姿を隠すために変身の魔術を行使し、普段は人間と変わらない姿を有する。

長年の地下暮らしで日の光に弱く変身が解けてしまうので、仮面で太陽の効果を遮っている。所轄の警官に今まで死肉を調達してきてもらったものの、発達した知性がさらなる食欲を呼び、ついに生きた人間に手を出すようになった。各メンバーが1つ2つの魔術を行使できる魔術師という設定もありかも。

端的に言えば、グールと手を組んだ刑事と元グールの警官との抗争に巻き込まれるのが探索者ということになる。

刑事が失踪した部分までは都市伝説は真実なのだが、手記の部分は所轄の警官が織り込んだものである。

その真意は彼とともに戦ってくれる人物を探している。

構成として

事件発生～噂の真相を知る～所轄の警官を探す～真相を知る～中ボス刑事を追い、戦う～警官との連絡でグールの現在地を知る～ラストバトルで終了ってところか。

落としどころのポイントは

- ・人食いとなった刑事を生かす（捕まえる）か殺すか
- ・マスカレードを全滅させるかどうか
- ・所轄の刑事の生死

といったところか。

刑事を生かすなら、刑務所でグールとなってゆく過程を描写するのもよし。

マスカレードを生かしたら、暴走した知性と元の心優しき性根との葛藤の末、自分の始末を探索者に付けてもらうってのもありか。

ラストバトル後マスカレードのそばにある魔術書の断片を探索者が放置したら、死肉を漁りに来たグール達から次世代のマスカレードが生まれることを示唆しても良い。（連続失踪事件の再来～探索者が最初の犠牲者）

原稿一枚で書くクトゥルフ神話TRPGパロディシナリオ「仮面」

<http://p.booklog.jp/book/90845>

著者：ユキ・オトコ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/cthulhutrpg/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/90845>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/90845>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ